嘘つきと呼ばれた青年の話

槻影

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嘘つきと呼ばれた青年の話

【Ｎコード】

Ｎ６２０３Ｆ

【作者名】

槻影

【あらすじ】

世界中で”スキル”と呼ばれる不可思議な超能力者が現われ始めておよそ三十年。政府から獲物として狙われ続けた青年・月人が、やっとの事で逃げ切ってみたらそこは何故か異世界で……。時間のある時に少しずつ書いているので更新速度はおそらく亀です。

第一話：勇者様とそれ以外（前書き）

初めまして、槻影（つきかげ）と言うものです。
以前異世界転移物にあこがれて書いた作品が残っていたので、更新は本当に……おそらく月一程度のゆっくりとしたものになると思いますが投稿させていただきます。
少しでも楽しんでいただけたら幸いですm（＿＿）m

第一話：勇者様とそれ以外

第一話　勇者様とそれ以外

何の前触れもなく、月人は気がつくと奇妙な部屋の中心にいた。
突然変わった風景に一瞬意識が空白になる。小さな音一つ存在しない静謐たる部屋。そしてその部屋を満たすむわっとした熱気。
ん？　あれ？　一体何がどうして俺がこんなところにいるのでしょうか？

凍り付いていた思考が徐々に解け、疑問が頭を過ぎる。

俺は確か……そう、走っていたはずだ。追手は完全に撒いた。逃走路は事前に完璧に予測してあった道筋で、万が一にもつかまることはありえなかったはずだ。
だが俺はこんな奇妙な部屋にいる。ん？　なんですか？　この展開は。
まさかあれ？　空間転移系の高スキル能力者が追手にいたんすか？　あれ？　まさか俺、囚われの身？
何で？　はっはっは、冗談きついっすよ、おやっさん。空間転移系のスキル保有者で他の生物を転移させる事ができるほどの能力者なんてランクで言えばＳＳＳ、世界中からかき集めても百人いるかいないかくらいですよね？
そんな連中を俺を捕まえるためだけに雇うなんて、税金の無駄遣いもといドケチな”白影”がやることじゃないじゃないですか。う

ん、今なら許してあげるから今すぐ俺を逃がせ！！

逃げている最中すら、まったく流さなかった汗が、頬を伝う。

周囲から感じる無数の視線。

そこは窓一つない密室だった。

周りには、現代では映画の中くらいでしか見かけない蜀台が六基。

その蜀台で煌々と燃える炎の向こうで、深くフードを被った人影がこちらを見ている。

心臓がはやがねのように鳴るのを意識しながら、そーっと辺りを見渡した。

一人、二人、三人……駄目だ、十人近くいる。多分全員なんらかのスキル保有者。身体から何か奇妙な力感じる。それプラスおそらく高位空間転移系の能力者

白影の上層部も思い切ったことをしたものだ。二、三人は覚悟していたがまさか十人近くとは。うーん、デンジャラスな連中だ。

まさに籠の中の鳥。四面楚歌。

あれか、命運つきたってやつか。しかしおかしいな、後半年は最低でももつと思っていたんだけど……まぁしゃーないわな。

月人自身が保有している能力は攻撃とは相反した能力だった。だがもし仮に月人がもっているのが攻撃系のスキルだったとしても、ここまで完璧に囲まれていたらどうにもならないだろう。大体囲んでいるという事は、ここに転移されるのを待っていたという事、一年もの間政府直属の対スキル犯罪専門機関”白影”から逃げ回っていた獲物を逃すわけがない。

月人が現在の状況に完全に諦観して瞼を閉じかけたその時、人影の一人が一歩前に出た。

ぼんやりとした灯に照らされるのは初老の男。豊かな顎鬚を持っ

たどこか品のよさを感じさせる老人。

あー人がいい方向に老成したらこうなるだろうなぁ、まあ俺を捕まえるような野郎だから心の中はどうだかわからんが……

ぼんやりと適当な事を考える月人の前で、その男が口を開く。

「よくぞ……よくぞ参った異国の勇者よ。此度の召喚、急な事と存ずるが緊急事態故お許し願いたい」

諦め、停滞しかけていた頭がその台詞に再稼動を始めた。

目を丸くして妙な事を言う爺を見る。爺の顔にふざけているような色はない。暑苦しいほどに真剣な表情で月人を見つめている。

ん？　これは一体何の罠だ？　何で包囲まで完了させておきながら変な事を……

おそるおそる尋ねる。

「は？　何言ってんの？　お前らが俺をここに転移させた。だから俺はここに居てお前らは俺を囲んでこれから焼くなり煮るなりするんだろ？　俺の人権も無視して」

最後のセンテンスを強調するように言葉を出した。

最も、人権とか大きな事を言ったが月人には人権はない。一年も前に剥奪されている。

人権剥奪。それは現代の日本では死刑よりさらに重い刑罰だった。

その罰の内容はただ単純に”法は貴方を守らない”という事。

何の権利もなく義務もない。たったそれだけの事だが、単純ゆえそれは相当の恐怖である。

日本では人権を剥奪された者は、人間社会のヒエラルキーの中にさえ混ざれない”廃棄物”のような存在。
何をされても文句を言えない決定的な弱者。
格差以前に比べる対象ですらない畜生以前の存在。
ネットで顔写真が公開され、法外な懸賞金が掛けられている犯罪者。
外に出れば襲われ、それでいて領域を持つ事も許されずただゆっくりと破滅に下っていく生きる屍。

初老の男が、驚いたような表情で周りの影と二言三言言葉を交わし、月人の方へ向き直る。

「とんでもない。異世界の勇者様は神と同義、最大限の矜持を持って歓迎させていただきます」

勇者？　歓迎？　何を言ってるんだこの爺は？

お香でも焚いているのか、独特の甘い匂いが鼻を刺す。
薄暗い中で見るその男の瞳に嘘をついているような色は見当たらない。
大体、賞金が掛けられている犯罪者に情けをかける理由がない。
いくら攻撃系スキル保有者ではないからと言って、賞金を掛けられる程度の実力は――高額な賞金を天秤に乗せてつりあう程度のスキルは保有しているのだ。
万が一にもこんな状況で白影の構成員が二の足を踏むわけがない。
何よりも、異世界の勇者という言葉が気になった。

「異世界の勇者様？　って事はここはあれか？　異世界って奴か？」

スキルと呼ばれる魔法によく似た力を持つ人間が現れ始めておよ

そ三十年、多少は超常現象と呼ばれるものにも慣れてはいるが、それでも異世界などというものの存在は聞いたことがなかった。
半信半疑で質問する月人に、リーダーらしき爺の後ろに立っていた影が答える。

「左様、ここは勇者殿が生まれ育ったチキュウと呼ばれる場所とは異なる世界で御座います」

渋みのかかった男の声が狭い部屋にこれでもかと反響する。
足元を見てみると、奇妙な模様が描かれていることに気づく。
六つの蜀台を点として、それらを線で結んだような図形。俗に言う六芒星と呼ばれる形。
その周りには、今まで見たこともない、奇妙な形の文字らしきものが躍っている。

もしかしてこれは……召喚のための”魔方陣”って奴なのか？

疑問に答えるかのように微かに発光する模様。
ミステリーサークルのようにも見えなくもないそれは、月人が今まで読んだことがある小説の中に出てくる魔方陣のイメージにこれ以上ないほど合致していた。胡散臭さの中に存在する僅かな真実味もまた。
信じてもいいかもしれない。いや、別に嘘でもどうせこれ以上結果は悪くなりはしまい。
仮に追手に捕まったら生きたまま腹開かれて精神操作系のスキル保有者に頭の中いじられて一生を道具として過ごすことになるだろう。
選択の余地などとっくの昔に消失していた。
もうあれだ。成るようになるだろ。

「わかった。信じよう」

「さすが勇者様、理解も早い。こちらとしても大助かりです」

月人の言葉に張り詰めていた空気が弛緩する。

爺の表情が、ちょっと見ただけではわからないくらい微かに和らいだ。

どこかの映画で出てくる魔法使いのローブみたいな服が持ち上がり、一拍してそれが手を差し出されたんだという事に気づく。

差し出されて取らないもの悪いかと、手を取った瞬間思い切り手を引っ張られた。

「っ……いきなり何するんだよっ！！！」

魔方陣から引っ張り出され転倒しかける月人。

何とかバランスを取り、文句を言うが引っ張った張本人である爺は、なにやら真剣な表情で手の平を見ていて何も言おうとしない。

何かあったのか心配になりそうなほどの時間がたち、

「おかしい……英雄に現れると謳われる”光御子の紋章”が現れておらぬ……お主本当に勇者か？」

「……あんた絶対おかしいよ。突然呼び出しておいて本当に勇者かとか」

そもそも古今東西……はどうかわからないが、現在の話に限って言えば、勇者などというファンシーかつファンタジーな存在が日本にいるわけがない。

まぁ勇者は別として、スキル保有者などという、比較的サイエンスよりマジカルに近い力を持つ者はそこそこいるがそれは置いとい

て、

「はっきり言わせて貰うが、俺自身自分が勇者なんていう大層な存在だとは思わない。もちろん魔王とかいたとしても倒せないから、俺の力じゃ」

隅の方から微かに聞こえた『えー、魔王倒せないのー？』とかいう落胆の声を華麗に無視する。

つかやっぱり魔王とかいんのかよ、とか思ったり。だがよく考えれば当然といえば当然かもしれない。魔王が居なければ勇者はいらない。悪人が居ない世界に警察はいらないのだ。特に、異世界から見ず知らずの他人を勇者として呼び出すなんて乱行、事態がよほどひどくならない限りしないだろう。

「しかしそれにしてはおかしい……これは異世界から勇者様をお迎えするための古来よりラクリエット王国に伝わる由緒正しい儀式、異世界の者とはいえただの人間が出るわけが――」

そんな事言われても俺はただの人間だ。一応スキルは使えるけど、それも攻撃系のスキルではない。いったいどうして俺を呼び出したりなんかしたんだろう？　Ｓクラスの攻撃系スキル保有者を呼び出せばよかったのに。

我が身の不幸、ではなく目の前で唖然としている不幸な人たちを見ながら一人愚痴る月人。

月人としては人生の間で一回あるかないかといえるほどのラッキーな事ではあるが、呼び出した側からすれば踏んだり蹴ったりの事態だろう。

若干の哀れみと我が身の悪運の強さを感じつつ、とりあえず慰めてやろうかとか考えていると、

「痛ったぁ……――ん？　何だここ？　何で俺、こんなとこにいんの？」

突然背後から聞こえてきた声に、反射的に爺を盾に取って後ろに隠れる。長年の逃亡生活の果てに身についた悲しき習性。

声の主は、筋骨隆々としたランニングシャツ姿の長身の男だった。目の覚めるような金髪が僅かな炎を浴びて赤く輝く。欧米の血が入っているであろうその双眸は炎のような赤。意志の強そうな瞳が、事態を飲み込めていない影たちを席捲する。

いきなり魔方陣の中心に出現した男に、部屋にいる全員の視線が集中した。特に左手、左手の甲に輝く複雑な形をした模様に。

「勇者……？　今度こそ本物の……異国の勇者殿ですか？」

「ん？　勇者？　何言ってんだ？　あーんど誰だおめえら。俺に喧嘩でも売ってんのか？」

男が口を開く。

荒々しいというより猛々しい声。怪しい人影に囲まれているにも関わらず全く萎縮しない態度は、日本から呼び出された月人から見ても”戦士”そのもの。

その佇まいになぜか感涙するじじい。周りを囲む人影の中には、もう地べたに座り、頭を深く下げている者までいる。

「おお、貴方様こそ本物の異国の勇者様のようじゃ。大神ニーナベルクルスよ、主のお導きに感謝致します」

爺の言葉は、すぐ後ろから出現した男を見ている月人の耳には入らなかった。

いや、入ってはいたがそれは意識しないうちにそれは抜け落ちて

いった。
突然現れた男に見覚えがあったが故に。その人影が自分に対してのいわゆる”天敵”であったが故に。
「ふん、何言ってんだがわかんねえが、俺とやるっていうんだな？」
馬鹿な。奴が勇者だと？　いや、確かに俺よりはよっぽど勇者っぽいけどさ。確かに強いだろうけどさ。よりにもよってこいつかよ……ほんと、勘弁。
内心涙するが、起こってしまった事実はいかなスキル保有者でも変えることはできない。

興味深そうに辺りを見回す男。何気ない動作ながらもそこには微塵の隙も見出せない。
薬により後天的に発現する能力者が多くを占める中、生誕した直後から既にトップクラスの異能を有していたと言われている天才。
何者にも従わぬ不遜な態度と万物を破壊する力を持って世界中から称えられる雷の騎士。
追われるものからすれば――たとえ自分がそんな大物に狙われる謂れがなかったとしても、だ。ただそのような力がこの世に存在するという理由だけで、恐れるのも仕方ないだろう。

攻撃系ＳＳスキル保有者。スキル名『ＣｌｏｕｄＥｎｄ』
その名は

”雷帝”ジーク・アーノルド・田中！！

「”雷帝”……田中、だと……！？」

沈黙

「田中って呼ぶんじゃねえええええ！！！」

怒気を孕んだ声と同時に発生する無数の光の渦。
とても避けきれない量の光の本流は月人をあっけなく押しつぶし、
失言に気づく間もなく月人の意識は闇の中に消えていった。

第二話：世界は常に冷たく

第二話：世界は常に冷たく

世の中の約九十パーセントは甘くない。
その事実に月人が気づいたのはいつの事だろうか。
少なくとも物心がついた頃には既に月人の周りは敵だらけだった。

人は金で、力で、権力で動く。
スキルと呼ばれる力がこの世に発生して三十年。
社会の基盤は、新たな力とともに根本から作り変えられていた。

その短くも長い三十年という月日は、ある特定のスキルを持つ者を”狩る”者達が現われるには十分すぎる時間だったのだろう。

何も悪い事はしていない。
人を傷つけたわけでも、物を盗んだわけでもない。
唯一つ、悪かったものがあるというならばそれは間違いなく『運』だった。
持って生まれた業。
無能力者として生まれたのなら、選択肢は他にもあっただろう。
だが、月人は生まれついてのスキル保有者だった。
生まれたばかりの――あまりにも幼い存在が持つには大きすぎる

――いや、”羨ましすぎる力”

後天的に使えるようになったのならば、巨万の富を生み出していただろう力は

生活と引き換えに月人の周りを敵だらけに変えた。

月人は心の底から理解している。

自分の持つスキルこの世で最も狙われやすいタイプのスキルだと言う事を。

無から特定のものを生み出す能力者。

本来中立である政府の目すら眩ませるほどの金の卵を産むガチョウスキルカテゴリー：Ｉ

人は、Ｉのスキルを持つ能力者を羨望と憐憫を持ってこう呼ぶ

『顕現能力者』と。

◆◆◆

「うわぁあぁぁあっ！！　それでも……それでも俺はやってないんです御奉行様！！　あれは偽札じゃなくて間違いなく本物ですよ！！」

絶叫が部屋中に響き渡り、月人は自らの寝言に驚いてベッドの上で覚醒した。

まだ半分寝ている脳。半分瞳を閉じた十人が十人情けないと感じるであろう表情で辺りを見渡す。

記憶にある我が家とも隠れ家とも白影に昔あった自分の部屋とも違った部屋。

古ぼけた卓上ランプ。煤けた黒い煙が立ち上がる四角い箱。真っ白に凍ったガラス。柔らかいというよりごわごわしたベッド。

ベッドに入っていても感じるほど空気は寒く凍っている。

あれ？　おかしいな。今は夏だったはず――

そんな事を考えながらなおも周囲を見回していると、

「……あえ？　あんた誰さ？」

すぐ側から冷ややかな瞳で月人を見ている女性の姿に気づいた。

白衣というより、白いマントのような衣装を着た二十代前半くらいの女性。顔つきは美人といえるくらいに整っているが、その視線

は凍えそうなほどに寒い部屋の空気に負けず劣らず冷たい視線だ。

「……」

沈黙のまま月人を睨み続ける女。

それとにらみ合いながら、冷気のおかげか月人の眠気が徐々に晴れていった。

ああ、そうか。確か異世界に飛ばされて――

鼻を刺す刺激臭。くしゃみを我慢しながら視線を動かすと、その先には煙を立てて動く奇妙な箱があった。

微かな振動が空気と石畳の床を伝って細かい振動を辺りに撒き散らしている。

「あんた誰？　ここはどこ？　あれは何？　私はだれ？　……って俺は月人。田島月人。出身地は日本。誕生日は二月二日で血液型はA型。好きな食べ物は米。やっぱり日本人はパンより米だよな。それであんた誰だ？」

「……王の命令で貴方が目を覚ますまで介護する事になった医者です」

言葉遣いは丁寧ながら、自称医者の目つきは尋常じゃないほど悪い。まるで親の敵でも見るかのような目つきに、半生を”獲物”として狙われてきた月人も一瞬引く。

なんだこいつ？　何で俺に殺気放ってんだ？　俺何も悪いことやってないよな？

心の中で自問する。だが、いくら考えても今までの発現の中に失言があったとは思えない。というかまだあってから一言しか話してない。わけわからん。

名前も名乗らず、医者とだけ自己紹介した女は、そのままの態度で椅子から立ち上がる。

視線の高さが同程度だったのが、”見下ろされる”に変化する。どちらにしても、嫌悪を隠そうともしないその医者の様子に、月人は口を噤むしかない。

「……早く立ってください。王から、起きたらつれてくるように、眼を覚まさなかったら燃やすように仰せつかわっております」

「ちょ……死んだらって――」

慌てて立ち上がる月人。

急にベッドから立ち上がったことで、部屋に満ちていた冷気が身体にまとわりつく。

「うぅ――何か寒いですねー、何かないですか？　着るの」

「ありません。さっさと行きますよ」

「そうっすか……」

そっけない答えに、しぶしぶベッドの下におかれてあった靴を履いた。

日本は夏だったため、月人の格好は半そでだった。冷気がじかに素肌に触れ、この気温はやばいと今更ながら自分の状況に気づく月

人。
いくらなんでもこのままではまずい。
「掛け布団持ってってもいいですかね？」
「……」
「んじゃ遠慮なく――」
沈黙を肯定と受け取り、掛け布団をまるでカタツムリのように上から被る月人。
その奇妙な出で立ちに医者は顔を顰めたが、そんな事を気にする気配もなく、
「さーさー、王様が待ってるんでしょ？　さっさとつれてってください」
「ッ――ついてきてください！！　ほら、さっさと！！」
「おわっ――ちょ……待って」
早足で部屋を出て行く医者を追って、月人は布団を被ったままの格好で慌ててそれについていった。

第三話：生まれた時に運は全て使い果たしました

第三話　生まれた時に運は全て使い果たしました

ファンタジーってのは所詮ファンタジーなんだな。

月人は、一人心の中でつぶやいた。

一国の王につれて来いと言われたと言われた時点で、月人はかつて夢見た中世の王城のような景色を予想していたが、どうやら今のこの世界の状況は思ったよりも深刻なようだ。

通されたのは、絨毯も何もない冷たい床がむき出しで、広々とした空間が広がっているだけのただの”謁見の間”だった。

壁に吊るされたランプは空気中を微かに舞う煤がこびりつき汚れ、くぐもった光をその寒々しい部屋に放っている。

「お主が異世界から誤って来てしまった者か――」

数段の階段の上、日本で言われる”上座”の席に座る白髪の翁が、口を開く。

顔色はやつれ、眼の下には隈が張り付いてはいたが、その声には確かな威厳が見て取れた。

その頭の上に申し訳程度におかれた質素な小さな王冠を見て月人思う。これがこの国の王なのだと。
くたびれよれよれになった真紅のマントは、かつては王たるものにふさわしい権威を示した品だったのだろう。
その手に力なく握られた王錫も、掲げるだけで民達を導くに足る王の証だったに違いない。
かつての栄光の陰を見て、月人は微かに顔を顰める。

本当にやばい状況のある国に呼ばれたらしい。昔から俺って運が悪いんだよな。追われ逃げ切り異界に呼ばれてみればこの状態。あまりの不運にもはや笑うしかない。

だが、笑っている場合でもない。笑ってどうにかなる状況だったらいくらでも笑うが、今は状況を確かめる時だ。

気を取り直し王に向かって顔を上げる。
月人は気づいていなかったが、布団から頭だけ出したその格好は、シュール極まりなかった。

「”来た”じゃなくて”連れて来られた”ですよ、この国の王様。俺もちょっとだけ信じられない話なんですが――」

辺りに満ちるは日本にいる限り縁がない”飢餓”の空気。
異界から勇者を呼び出さなければならないほどの状況とやらを、月人は初めて肌で理解する。
この国の者は――王も兵も大臣も皆飢えている。物質的にも、そして精神的にも。
本来飢えとは無縁なはずの大臣の頬がこけ、遠めで見ても判る程に錆びた槍を持つ兵の隊列。

張子の王国。
見た目だけはかろうじて国の中枢たる様相を保っているが、この現状から見ておそらく王に民を統制するほどの力はないだろう。
この国が元はどのくらい大きな国だったか、つい先ほど呼び出されたばかりの月人には判らない。
だが、今月人の眼の前にあったのは、紛れもない滅び行く国の姿だった。

「それは、判っておる。すまなかった。どうか許されよ。今我が国は滅亡の危機に瀕しておる」

辺りを漂う饐えた匂い、屋内にも関わらず冷え切った空気に王の声が響き渡る。

「魔王ですか？」

「ああ……一年程前に復活した氷の魔王と呼ばれる魔人の仕業じゃ。あ奴の強大な氷の魔力によって、穀物は枯れ果て、動物は飢え、国中が大規模な飢饉に見舞われた。他国を頼ろうにも、魔王のあまりの力に皆尻込みし、助けすら望めぬ」

「氷の魔力……？」

氷の魔力……ファンタジーだな。それで屋内にも関わらずここまで寒いのか。さっきから気になって仕方なかった疑問が、独善的かつ適当な思考により氷解する。
この寒さと比べたら、さっきまで月人が寝かせられていた部屋の方がまだ暖かい。

月人自身は、どんな状況でも生き残る自身があった。食べ物の不

足も物資の不足も月人にとってはあまり重要なファクターではない。いざとなったら他国に逃げ込むのもそう難しい話ではないだろう。そして、それをこの王が止めるとは思えない。なぜなら王が望んでいたのは勇者であって、魔王を倒す力なんてとてもじゃないけど持ち合わせていないただのクラスＢ＋の顕現能力者ではないのだから。

これからどうするか。

まずは、この国から出るべきだ。雷帝のいる国なんて、一秒たりとも居たくない。たとえ雷帝が俺の事を知らないとしても、だ。

頭を回転させ、言葉を選んで月人は口を開く。

「しかし……もう大丈夫でしょう？　”雷帝”が――貴方達が呼び出したあの勇者が負けるとは思えない。」

「ふむ、そういえば、異界の者――月人と言ったか？　月人は勇者様を知っておったそうじゃな？」

「そりゃもう、有名ですから。ジーク・アーノルド・田中は」

どのくらい有名かって、世界で最も強力なスキル保有者トップ１００の上位にランクインするほどに有名だ。

追われる立場から、月人はその百人の名前と特徴と能力を全て記憶している。いつでも逃げられるように。

「……強いのか？　兵などいらぬと、魔王の魔力が支配する極寒の外界をたった一人で旅立っていかれたが――」

「化け物っすね。ぶっちゃけあの男に敵う存在なんて滅多にいないと思いますよ？」

「ふむ……」

月人にとっては、絶対相手をしたくない存在のうちの一人である。
相対するは言うに及ばず、雷を駆るあの男からはただ逃げ延びることですら困難だろう。

迷いない月人の言葉に、ほっとした表情をする王。
周りの兵士達の表情も、微かだが安堵に揺らぐ。

緩んだ空気に、月人がさて自らのこれからについて切り出そうかと考え口を開きかけた瞬間、

「ちょっとお待ちを！！　こんな、勇者様の振りをして異界からやって来た怪しい男の言う事をそのまま信じてしまっていいのですか！？」

その雰囲気をぶち壊すように、女の声が辺りに響き渡った。
その言葉に、再びざわめきを取り戻す者達。
顔を顰め辺りをその声の元を探す月人の眼に入ってきたのは、さきほど月人をここまで案内した女医の姿だった。

「俺は嘘なんていってねえよ。嘘言っても得にならないじゃん」

「黙りなさい。偽勇者の言う事なんて信じられるものですか」

「俺、自分が勇者だなんていった覚えないんだけど……」

聞く耳を持つ気配のない女。それに同調する声が、あたりの兵の中からもちらほら上がり始め、一度緩んだ表情がまた不安げな物に変わる。

この状況は不利だ。月人は一人唇を噛み考える。

突然異界から来た男と、この国にもともと住み着いていた医者。どちらの言う事に信憑性があるかは明らか。振りをしてやってきたのではなく、呼び出されたのだが、その事をどれだけの人間が知っているか――

そこで月人は対象を女医ではなく、王に定めた。

「王様、この女が勇者様の力を信じられないだってさ」

「――ッ！？　だ、誰もそんな事は……」

「俺の言う事を信じないって言うのはそう言う事だろ」

静かに二人を見つめる王に、周りの人間に言い聞かせるように、月人は続ける。

「大体、さっきも言ったが俺が嘘教えて何の得があるんだっての。あんたらは勇者を呼び出そうとして、実際左手に勇者の証を持つ男を呼び出した。俺は来たくもないのにその召喚に巻き込まれただけだ！！」

行幸だったけどな。
自分を狙う白影のスキル保有者が蔓延る日本より、飢えが蔓延るこの世界の方が都合がいい。

その事を表情に出さず、手を大きく広げて悲しげな表情で大きく首を振って見せた。

ざわめく槍兵達。大臣や王は召喚について知っているだろうが、末端まで詳しく知らされていない事は明らかだ。
そして、

「月人、そなたの言うとおりじゃ。イールよ、口を慎むがよい。月人殿をこの世界に呼び出してしまったのは明らかなこちら側の過ちじゃ。許されるとは思わぬが、悪漢扱いなどしたらこのラクリエット王国の――いや、しいてはこの世界の不名誉ともいえる」

悔しげに俯くイールという名の女医。
勝利を確信する。王を見上げる。口を開く。

「王様、しかし、このイールが俺を疑う気持ちもわかるのですよ。なんたってそちらのミスとはいえ、俺は異界からやってきた者ですからね。正直言ってこの国が滅びても俺には何ら関係ないというのは本音――」

心中笑う。

雪に閉ざされ、食物に乏しい、滅亡に瀕している国。
俺のスキルでは、どんなのか知らんが魔王なんてのは倒せない。
俺では勇者になれない。だが、民を救うことはできるだろう。

田島月人。十八歳。二つ名は”虚言妄言”

嫌いな物は人間
好きな物は白米
被人権剥奪者
罪状：通貨及証券模造取締法違反（一万円札の偽造）

「そこでどうでしょう。雷帝が魔王を倒すまで、俺はここを出て行きます。俺なんかよりは医者の方が役に立ちますからね。なーに、大丈夫。死にはしないので」

一人異世界で生きていく決意をした瞬間だった。

第四話：どこかのだれかに

第四話　どこかのだれかに

染み一つない白い円卓。
白のプレートを敷き詰められたその部屋は、まるで神殿のような空気を讃えていた。
円卓の上座に座るは三人の人間。
老齢ながらに、まるで人を威圧するかのような鋭い視線を保つ、熊の如き大柄の男。
稀代の美貌といっても遜色のないほど整った顔に穏やかな笑みを浮かべた、落ち着いた雰囲気の妙齢の女人。
秘境からやって来たといわれても疑われる事はないであろう、白いひげを床まで垂らした仙人のような老人。

三人は、それぞれ特異な外見を持ちつつも、共通して、意識して見なければその場にいる事を忘れてしまいそうになるような、不可思議な印象を人に与えていた。

円卓を囲む人数は十一人。
残りの八人の視線は、この組織のＴＯＰである三人に総じて注がれている。

まるで瞑想しているかのように目を瞑る三人。

やがて、その部屋に静謐な空気が満ち足りた頃、その中の一人である大柄の男が口を開いた。

「それで……逃がした、と？　”王剣”」

体型に相応しい威圧を秘めた声。

本能に忠実な野生の動物ならばその声を受けただけで、わき目も触れずに逃げ出していただろう。

全員の視線が一人の青年に向けられる。腕を組んだまますぐ眼の前の空間を睨みつけている青年に。

その声を受けた一人の少年は、向けられた視線にもまるで動じず静かな口調で答える。

「逃がしたのは俺じゃねえ。確かに今回の作戦は成功していた。命令どおりに追い込んだし。あんたら”三帝”が連れてきた接空が期待通りの働きをしていたら、今頃は奴は籠の中の鳥だ」

空っぽだった口調が次第に熱を帯び始める。

これはこいつらが行った業の結果だ。

当然だ。当然。必然。結果然り。

燃え上がるような怒り。沈めていた炎。

少年の視線が、ＴＯＰ三人のすぐ隣に座る女に向けられる。

「おいおい、接空さんとやら。てめえ、この落とし前をどうつけてくれるつもりだ？　俺たちが！　独自に！　追い詰めた奴を！」

触れてもいないのに、接空と呼ばれた女の首に深い影が現われた。

浮き上がる身体。

女の瞳が虚ろに変わる。奇妙に開閉を繰り返しているその唇からは、音一つ聞こえてこない。
スキル使用時特有の、空間自体が蠢くような気配があたりを支配する。
ぴんと張りつめた空気。
その顔には、明らかに酸欠による鬱血の様子が如実に現われてきた。

「王剣、これ以上やると死ぬ」

王剣の隣に、姿勢正しく座っていた十代後半くらいの青髪の少女が、接空が死に掛けた所を見計らって蛮行を諌める。
アシンメトリーと呼ばれる髪型。左右非対称に切り揃えられた前髪の奥底の瞳が、苦しそうに揺れる接空を無表情に見つめている。
本気で止めるつもりがあるのかすら定かではないその言葉に、王剣は怒りの混じった壮絶な笑みを返した。

「こいつは俺等に偉そうに”奴を捕まえる”と豪語した挙句失敗したんだぜ？　ここで殺してしまった方が本人のためだとは思わないか？　それにお前も昨日めちゃくちゃ怒ってただろ」

「次失敗したら殺せばいい。その時は私が殺る。接空、いい？」

”何かの力”から開放され、接空の身体が床に崩れ落ちる。
咳き込む接空に、その少女は静かに宣告した。
表情は笑っていても、その目は全く笑っていない。

「空間転移、できなかったでしょ？　王剣の”有象無象”なら、貴方を完全に制圧できる。逃げられるとは思わない方がいい。私達に雇われた時点で貴方の未来は”死”か”栄光”か。次失敗するか、

尻尾を巻いて逃げ出したら今度は私が”なるべく苦しめて”殺してあげるから」

「おいおい、てめえはお先真っ暗だな。”水聖”は俺と違って優しくないぜ？　なんたってこいつは生粋のサド――ぶはっ……何するんだッ！！」

突然現われた直径三十センチほどの水球が祐の眼の前ではじけ、顔と言わず服といわず全身を水浸しにした。

抗議の声を上げる祐に、酷く冷たい視線を向ける水聖と呼ばれた少女。

それを見て、仙人のような爺がため息をついた。

「王剣、水聖、二人ともやめい。……接空よ。そういうことじゃ――次は……やれるな？　王剣はちと乱暴でのお……次は止めきれんかもしれん」

止める素振りすら出さなかった三帝の言葉に、接空はただただ頷き答える。その顔に浮かんでいる明らかな恐怖だった。自らの能力を遥かに超える力を眼の前に、選択肢は一つしか存在しない。

「王剣、令は変わらん。”虚言妄言”を捕らえい。ただし――」

「そこまでいい。分かってる」

円卓を囲んでいた人間のうち、五人ほどが一斉に立ち上がる。

王剣は、その瞳を細め獰猛に笑った。

「誰にも気づかれないように、だろ？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6203f/

嘘つきと呼ばれた青年の話

2010年10月9日02時59分発行